

「調査は想定外だらけ」 樫永真佐夫（国立民族学博物館教授）

（1）血まみれの調査者 2020 年 6 月 6 日刊行

24 年前のベトナムで、黒タイ族の村における調査許可が下りたとき、外国人が 1 人で少数民族の村に住み込んだ前例はなかったから、私の胸は高鳴った。しかも悪路はるばる 400 キロを、都市部ではすでに時代遅れだが山岳部ではなお活躍中のミンスクという、すぐに壊れるが簡単に直せる旧ソ連のベラルーシ製バイクで走破する冒険のロマンチズムにも心を奪われていた。

10 月のある日、4 日の旅程でハノイを出発した私だったが、2 日目に峠道で雨に遭い、下りのカーブであえなく転倒した。バイクは操縦不能。とりあえず峠の頂きにあった一軒家まで押して戻った。玄関先から声をかけバイクの修理について尋ねたが、家人の男はあっけにとられながら私の右足を見つめている。やっと気づいた。右膝から下がぬれているのは雨のせいではない。血まみれではないか。

男のバイクで私はザオ族の村にある療養所に運ばれた。野次馬たちも大集合。そこで私はいきなり男たちに羽交い締めにされた。始まったのは、破れた皮や肉をハサミで除去しオキシドールをぶっかける荒療治。そのあと峠の一軒家に戻り軒の雨だれを眺めていると、夕刻バスが通りかかった。壊れたバイクごと積んでもらい、翌日目的地にたどり着いた。しかし運転手にはぼったくられ、私の身と心はズタズタだった。



行商人のバイク。かつて私が転倒したのは、おそらくこの坂＝ベトナムのソンラー省で 2012 年 11 月 12 日、筆者撮影

ベトナムで文化人類学の調査をするのは難しい。人類学者の情報がベトナム戦争で米軍に利用された苦い経験もあって、外国人研究者に対する警戒は根強い。当然、少数民族の黒タイ族の風俗習慣を深く理解したいという私の思いなど地元公安もはかりかね、私は厳しく監督されていた。だから週に1度は役場への報告義務があったし、担当の公安もたびたび聴取に来た。

とはいえ聴取は厳粛ではなかった。いつどこで誰に会ったかなどを少し聞かれる以外は世間話である。それに担当者は家族や友人を紹介もしてくれたから、公安の知り合いも他に増えた。

そんなことから一人の黒タイ族の公安と親しくなった。彼は私の研究にも興味を持ち、ある週末、実家に遊びに行こうと誘ってくれた。父が祈祷師で黒タイ文字も読めるほどの知識人なのだという。私は喜んで彼に従い、広い田地を前にして石灰岩の奇岩怪石に囲まれた風光明媚な村に赴き、ご飯をごちそうになり、親族や儀礼の話を聞き、化け物がすむと恐れられる洞窟を村の少年たちと探検して楽しく過ごした。

その数日後、担当者が聴取に来た。まさに取り調べの顔つきだ。私は調査許可を得ていない村に行ったことを叱責された。後に、私を村の実家に招いてくれた公安が他の町に転属されたことを知って申し訳なかった。



吊り橋の上で出会った黒タイ族の子どもたち＝
ディエンビエン省で 1997 年 11 月 23 日、筆者
撮影